

幼稚園における即興的な歌に対する言語・会話面からの事例分析

(幼児教育講座) 深田昭三

Linguistic and conversational case analyses on young children's impromptu songs in preschools.

Shozo FUKADA

(平成 28 年 7 月 28 日受理)

問 題

音楽表現において、幼児は単に音楽を与えられ、吸収する受け身的な存在ではない。最近では、能動的に音楽を作り出す存在であるとみなされ、そのような能動性によって創造的かつ自発的な音楽活動実践が試みられている（たとえば小池，2015，2016）。

この幼児期の音楽的能動性はどのように発達していくのかについても研究が行われてきた。まず、歌の発生の端緒を遡るとその発生は非常に早いと言われている。細田（2001）は、子どもの歌は言葉の発生と相前後して生じるとしている。細田は4人の子どもの観察を行い、言葉の発生が1歳1ヶ月～11ヶ月であったのに対し、最初に歌を確認したのは1歳4ヶ月～9ヶ月であった。遠藤（1999）は、1名の女兒を継続的に観察し、1歳2ヶ月から始まる「聞いて合わせる」時期、1歳7ヶ月から始まる「作って合わせる」時期、そして1歳8ヶ月から始まる「ソングを歌いながら動く」時期へと発達することを示した。いずれにせよ歌の萌芽は1歳代から見られることとなる。

一方、幼児が遊び場面で示す音楽的表現については、4歳児前後を中心に知見が蓄積されている。

たとえば、矢部（2011）は、4歳児のクラスの幼児の音楽的表現を検討し、幼児の音楽的表現は「ことばの抑揚の強調」「話しことばの抑揚が強調による拍節的・旋律的な構成」「話しことばの抑揚変化による、拍節的・旋律的な構成」の3種類によって形成されるとしている。

坂井・五味（2003）は、好んで「つくりうた」を歌う1名の4歳0ヶ月の女兒を取り上げ、この幼児のつくりうたの音声データを解析した。この幼児は、子ども用の図鑑をもとに思うままに歌うことのできる幼児であった。その結果、つくりうたを歌うときには声域が広く（21半音）、延長、上昇、バウンドしながら音質、音量を自在に変えて歌っていた。

子ども同士の音楽的表現の発生について、先に引用した矢部（2011）は3つの段階を経ることを想定している。それは、「1人の遊びの場ではなく、遊びの中で友だちとのかかわりが生まれる場において、自分の感情やイメージを他者に伝えたいという欲求が生じ、表現が生み出される」段階、

「遊びの中で生み出された音楽的表現は、友だちによって模倣され、イメージや感情の共有が行われる」段階、「身体的同調を伴う音楽的表現は何度も繰り返される中で、拍節的・旋律的にまとめられ、音楽的コミュニケーションによる遊びが生み出される」段階であり、そこでは友だちとの関係が不可欠であるとしている。

4歳児クラスの幼児と保育者による音に関する発話を「擬音・擬態語・効果音等」「リズム付きの言葉」「オーディオやBGM、楽器を用いたもの」「歌・ハミング(自作を含む)」に分けて検討した千田(2011)も、どのカテゴリーにおいても「発話にリズムを感じる場合、往々にして数人の幼児が集まっていることが多い。これは歌やリズムが友達との同調行動の手段となっているのではないだろうか。」と考察し、音楽が友達とのつながりを深めるためのものとして機能していることが考えられるとしている。

中川・片山(2015)は、4歳児クラスを対象に観察をしたところ、幼児が自発的に音楽を介した表現を行う姿が見られ、それは自他の感情調整の役割を果たしていること、共通に知っている歌は表現したい意図や感情を共有する際の媒体となって、幼児間のコミュニケーションを円滑にする役割も担っていることが示されたとしている。

上記の知見をまとめると、歌の発生は言葉の発生と相前後して始まること、4歳段階では幼児の音楽的表現は言葉をベースにして抑揚の変化をつけることによって音楽的表現が作り出されること、自発的な歌は幼児間の社会的相互作用によって生まれ、感情調整の役割を果たすことで幼児の社会的つながりやコミュニケーションを促進する効果をもつとまとめられよう。

しかしながら、従来の研究では自発的な歌やつくりうたとも呼ばれる「即興的な歌」を一括して取り扱う傾向があり、即興的な歌の中にどのような差異があるのかを、言語的な特質や会話的な特質の側面から分析することは、あまり行われてこなかった。そのため、上記の結論が即興的な歌の全般についてあてはまることなのか、あるいは代

表的な例についてのみ当てはまるのかについて、さらなる検討が必要であると考えられる。

本研究ではまず一つ目として、即興的な歌の言語的特質について検討したい。言葉をベースにして抑揚の変化をつけて音楽的表現が作り出されるとすれば、意味の明確な歌詞に相当する言葉がそもそも存在することが期待されるが、どの即興的な歌にもこれがあてはまるのかについての検討を行う。

藤田(1998)は、2歳児の女儿と男児の言葉について、公園の砂場での応酬を紹介している。そして言葉としての意味はなさないもの、音響的には意味のある「唱え言葉」であったことを指摘している。藤田が指摘するように、年少の子どもたちが音響的に敏感であるとするならば、より年長の子どもたちに見られる即興的な歌でも、言語としての意味性は欠くものの音楽性は有している歌も存在するのではないか。

本研究では言語的な形式や意味性の観点からコトバ、オノマトペ、ジャーゴン、スキャットに分け、このような言語的な特質の面で異なる即興的な歌が存在するかどうかを検討することを1番目の目的とする。

二つ目としては、即興的な歌の会話文脈について検討したい。つまり、幼児の音楽的表現は集団場面だけ見られるのか、それとも会話文脈を欠く一人遊びの時にでも観察されるのかということである。

持田・金子(2008)は取り上げた事例2で、みんなとは離れて一人でメロディーを口ずさみながら踊っていたA子を報告している。日常観察的にも、このように一人遊びの中で即興的な歌を歌っている姿は珍しくないと思われる。

そのため、本研究では即興的な歌が歌われる場面を、会話的な場面と独語的な場面に区別し、会話状況の違う即興的な歌の存在を検討することを2番目の目的とする。

これらの検討を経た上で、各事例を考察することで、言葉を含む人の声が音楽的特質を持つにはどのような条件が必要なのかを論じることによ

って、今後の創造的かつ自発的な音楽活動実践への示唆としたい。

方 法

1. 用語の定義

本研究では、日常的に使っている言葉や音声のうち、通常とは異なる独特のリズムや音調が付与された音楽性をもつ言葉や音声を「歌」とした。この歌のうち他者から促されたのではなく、自分から発した歌を「自発的な歌」とした。また、自発的な歌のうち、既成の歌やその変形、あるいは「♪この指と一まれ」や「♪○組さんの一みーな一さん」(以下、♪の後に下線部を付した部分は歌であったことを示す)などの決まり文句を歌っているものを除いた、子ども自らが創作して発した歌を「即興的な歌」として、本研究の分析対象とした。

2. 使用事例

あまり生起頻度の高くない即興的な歌の多様な事例を収集するには多くの時間を要すること、短期に事例を集めると即興的な歌をよく歌う幼児の事例に偏る傾向が生じることから、本研究では過去の研究で収集した事例を含め、多様な幼児の多様な即興的な歌の事例を分析対象とすることとした。

具体的には、平成 19 年度に愛媛大学教育学部に提出された卒業論文(高橋, 2008)において仲田明日香氏(旧姓高橋)が収集した事例のうちから即興的な歌に該当する 16 事例、平成 23 年度の卒業論文(高橋, 2012)において下村加奈子氏(旧姓高橋)が収集した事例のうちから 8 事例、平成 24 年度の卒業論文(野中, 2013)において野中未来氏が収集した事例のうちから 5 事例を、各氏から本研究での使用許諾を受けて用いた。また、新たに 2016 年 1 月から 2 月にかけて収集した即興的な歌 7 事例を加え、計 36 事例を本研究での分析対象とした。

4. 観察対象児と事例の収集方法

観察対象児は、愛媛県内の F 幼稚園に在籍していた年少児、年中児、年長児であった。

F 幼稚園において、幼児が登園してから降園するまでの様子をビデオカメラにより記録した。その後、ビデオカメラの画像と音声から、幼児が歌を歌っている場面を事例として書き起こした。

事例を収集した幼稚園と、事例収集の手順は、すべての事例収集において同一であった。

5. 即興的な歌の分類基準

本研究では、まず幼児の即興的な歌を言語的な意味性と形式の点から「コトバ」「オノマトペ」「ジャーゴン」「スキヤット」の 4 種類に分類した。

これらのカテゴリーの定義は以下の通りである。まず、オノマトペを除く意味の明確な言葉に独特のリズムや音調を付与することによって音楽的特質を備えた歌を「コトバ」とした。オノマトペの音調を音楽的に強調した歌は「オノマトペ」とした。音楽的特質が付与されている音声ではあるものの伝達可能な意味を持たないものは「ジャーゴン」とした。また、単音節あるいは複数音節が繰り返される音声による歌は「スキヤット」とした。

次に、幼児の即興的な歌を会話文脈の点から「会話的歌」と「独話的歌」に分類した。対話相手が存在し、その即興的な歌が対話相手に向けられている場合を「会話的歌」とし、対話相手が存在しないか、相手がいたとしても相手に向けられていない即興的な歌を「独話的歌」とした。

結 果

1. 即興的な歌の分類

方法の「即興的な歌の分類基準」で示した規準によって分類した結果を表 1 に示した。また、分類された 36 個の事例のうち、即興的な歌に当たる箇所を表 2 に示した。ただし、本研究の事例の収集ではタイムサンプリングなどの手法を用いず、収集した言語資料の中から典型的な即興的な歌の事

表 2. 本研究で分析対象とした事例に含まれる即興的歌

コトバ	会話的歌	3 歳児	あつやっぱり好きよー/ふったりーになっちゃったー
		3 歳児	ひーくんいくよー
		3 歳児	ヤギんとこ行っくー
		3 歳児	ふたりきょうだい, ふたりきょうだい
		3 歳児	こっちにきーて
		4 歳児	キューピーちゃん(事例 1)
		4 歳児	おーい, おいおいおいおい/やっほー/しゃっほー 他(事例 2)
		4 歳児	ひ, み, つー
		4 歳児	がんばれ がんばれ がんばーれ!
		4 歳児	いーかんべー, コーランべー
		5 歳児	せんせいは?
	独語的歌	4 歳児	たーいーこ, たーいーこ, パチパチたいこー
		5 歳児	てっつぼーてっつぼーてっつぼー(足をつけて)足つくけどねー(事例 3)
5 歳児		ボード, どーろどろ	
オノマトペ	会話的歌	3 歳児	ヒューヒュー
		4 歳児	ツーンツン
		4/5 歳児	ワウワウワウ, ワウワウ(事例 4)
		5 歳児	モウモウモウモウモウモウ…
	独語的歌	3 歳児	ボタボタボター/ポタポタポッター
		3 歳児	ギッタンバッコン, ギッタンバッコン
		4 歳児	しょーぼうしゃ, シヤイーン
		4 歳児	ピーピーピーピーピー/プーププーププープ
		4 歳児	トントントン(事例 5)
		5 歳児	サーラッサーラになったー
ジャーゴン	会話的歌	3 歳児	ボボビボビーボボ, ボボーンボボーン/タカイバン, タカイバン, タカイバーン。ターカーイ, ターカーイバン。(事例 6)
		5 歳児	ほら, ちょっとラッポーパーチョレ/ヤノーニイー? Yーせんせー
	独語的歌	3 歳児	イーグアータマー, イーグアータマー, イーグイーグイーグイーグアタマー
		3 歳児	フッフッフッーン, ティオン, ティオン
		4 歳児	ダークダーク, キーシニー, ウソカッタデ/ヒトチキーチ, モーコバーテ, イタカタンデ/ウミーノチキ, チーカガー, アタカテンキ(事例 7)
		4 歳児	ウーンダヨランランラーン
		5 歳児	オメガニーウーンクー
		5 歳児	オメガニーウーンクー
スキヤット	会話的歌	4 歳児	タッター, タラタララータータ / トウトウトウルトウトウルー(事例 7)
		5 歳児	エ、オ、ア
	独語的歌	4 歳児	ナーナーナーナー, ナーナーナー
		4 歳児	フーフーフーフーン/ラーラーラーラー(事例 8)
		5 歳児	ホーホホーホホー

注1:繰り返しの歌は、繰り返しを適宜整理して示した。

注2:本文中に示した事例は()内に事例番号を示した。

表 1. 即興的な歌の分類結果

	会話的歌	独語的歌	計
コトバ	11	3	14
オノマトペ	4	6	10
ジャーゴン	2	5	7
スキヤット	2	3	5
合計	19	17	36

例を抽出する手法を用いたため、表 1 の数値が各カテゴリーの生起頻度を正しく表しているわけではないことには留意する必要がある。

2. コトバによる歌

コトバ事例に該当した即興的な歌の特質を、会話的歌と独語的歌それぞれにおいて以下に示したい。

まず、コトバ事例では、「♪せんせいは?」とか、「♪ふったりーになっちゃったー」など、通常の会話の一部分にリズムカルな特質を与えて歌う事例が見られた。一方で、リズムカルな特質を与えられたフレーズを何度も繰り返す事例も少なくなかった。言葉の繰り返しによって、次第に本来その言葉が持っていた伝達的な意味が失われ、即興的な歌そのものを楽しんでいるようであった。

たとえば、事例 1 では、男児 A が発した「♪キューピーちゃん」というフレーズが何度も繰り返され、男児 B にも共有されていた。後半の「♪キューピーちゃん」では、この言葉が持っていた意味伝達的な側面は失われ、二人でこのフレーズを言い合い、コトバの音響的な響き自体を楽しんでいた。

事例 1 4 歳男児 A, B (会話的歌)

水遊びをするためクラス全員で並んでプールへ移動している。男児 B の後ろに男児 A がいる。

男児 A	「 <u>♪キューピーちゃん, キューピーちゃん, キューピーちゃん</u> 」 男児 A は観察者に気付く。
男児 A	立ち止まって右手を振りながら

男児 B	「ばいばーい」 男児 B も観察者に気付く。 立ち止まって左手でピースしながら「 <u>♪ばいばーいきーん</u> 」 男児 A の後ろにいる男児数人が「行くよ」と口々に言う。 すると、男児 A, B は一緒に走り出す。
男児 A	駆け足しながら、走るスピードに合わせて「 <u>♪キューピーちゃん</u> 」
男児 A, B	駆け足しながら、走るスピードに合わせて「 <u>♪キューピーちゃん</u> 」
男児 B	「 <u>♪キューピーちゃん, キューピーちゃん, キューピーちゃん</u> 」
男児 A	「はは、 <u>♪キューピーちゃん, キューピーちゃん</u> 」 年長保育室の前まで来るとやめる。

注：事例中の ♪ 以下の下線部は、その部分が歌であったことを示す。以下の事例についても同一の表記を用いた。

次の事例 2 でも、音楽的な特徴を持つ呼びかけの感動詞が男児 C と男児 E の間で繰り返された。しかし事例 1 が同フレーズの繰り返しであったのに対し、本事例では「♪やっほー」から「♪しゅっほー」「♪やっこー」などリズムは維持しつつ音韻の入れ替えが行われた。さらにコトバの応酬が進むと、音韻の入れ替えにとどまらず「♪にやにやにやー」「♪しゅしゅしゅしゅしゅしゅしゅ」などリズム面での変化も試みられ、次第に言葉としての意味を失い、ジャーゴン化していった。

事例 2 4 歳男児 C, D, E, F (会話的歌)

男児 C, D は車に乗って、男児 E, F は年長組裏のテラスにあるブロックの上にいる。

男児 E	「C くん <u>♪おーい</u> 」
男児 C	「 <u>♪おーい, おいおいおいおい</u> 」
男児 E	「 <u>♪やっほー</u> 」
男児 C	「 <u>♪やっほー</u> 」
男児 C	「 <u>♪しゅっほー</u> 」
男児 E	「 <u>♪C くんやっほー</u> 」

男児 C	「♪やっほー」
男児 E	「♪やっこー」
男児 C	「♪にやっほー」
男児 E	「♪うっこー」
男児 C	「♪しゃっほー」
男児 E	「♪ろっこー」
男児 C	「♪によっほー」
男児 E	「♪やっこー」
男児 C	「♪ろっこー」
男児 E	「♪ななこー」
男児 C	「♪にやにやにやー」
男児 E	「♪たちゅてー」
男児 C	「♪しゃしゃしゃしゃしゃしゃ」
	それぞれの遊びに戻る。

コトバ事例であっても、独話的歌のカテゴリに入る事例も少ないながらも存在していた。この場合、次の事例3のようにいわゆる独り言の中の言葉が歌に転化することにより生じるものと考えられる。この事例では女児 H が途中から参入してくるが、いったん「いいよ」と応じながらも、再び「♪てっつぼーてっつぼー・・・」と独話的歌に戻っている。

事例3 5歳女児 G,H (独話的歌)

女児 G は、園庭の球形遊具で遊んでいる。

女児 G	球形遊具の中にぶら下がり、足を前後に動かしながら、 「♪てっつぼーてっつぼーてっつぼー (足をつけて) 足つくけどねー」
女児 H	「いーれーてー」
女児 G	「いいよ」 さきほどと同じようにしながら、 「♪てっつぼーてっつぼーてっつぼー, ふふふっ」 球形遊具から出る。

3. オノマトペによる歌

オノマトペ事例では、「風が♪ヒュー, ヒューい

よるもんね」のように、通常のおノマトペの音調や音長を変化させることでリアルな状況を描写しようと試みたり、「♪ツーンツン, ツーンツン, ツーンツン」とおノマトペを繰り返す事例が見られた。

事例4でもおノマトペを何度も繰り返かえし、そこでの音調を変化させることで、ふり遊びでイヌになっている男児 I が、男児 J に対しておノマトペを通してメッセージを伝えようとする歌も見いだされた。

事例4 4歳男児 I, 5歳男児 J (会話的歌)
遊戯室前のテラスで男児 I と J が遊んでいる。

男児 I	「♪ワーウワーウウ, ワウウウ」
男児 J	「泣きむしイヌだ」
男児 I	「♪ワウワウワウ, ワーウワーウ」

おノマトペ事例では独話的歌も少なからず見いだされた。コトバ事例と同じように、水のこぼれる様子を「♪ポタポタポター」や「♪ポタポタポッター」と歌で表現したり、おもちゃの車に乗りながら「♪ピーピーピーピーピー」と歌ったりするなど、独り言の中のおノマトペが歌として歌われる事例が見られた。

そのほか、次の事例5のように自らのリズムカルな動きに合わせてリズムカルにおノマトペで歌う例も見られた。

事例5 4歳男児 K (独話的歌)

男児 K は空き箱を2つ組み合わせ、一端のみをセロハンテープで留めている。

男児 K	空き箱同士を叩き合わせているうちに、テープの接着が剥がれる。 「とれた」 接着させていた空き箱を分離させる。 箱と箱, 箱とペーパー芯, 箱と手などさまざまな組み合わせをし
------	---

	ながら叩いて音を出す。 次第に叩いているリズムカルな音に合わせて「♪トントントン」と歌い始める。
--	---

4. ジャーゴンによる歌

ジャーゴンは、「♪ウーンダヨランランラーン」など意味の無い言葉で歌う例であり、一般に即興的な歌として周囲の大人にも印象に残りやすい歌でもあろう。「♪イーグアータマー、イーグアータマー、イーグイーグイーグイーグアタマー」などのように、意味はないものの言葉の響きを楽しんでいるかのようであり、また何らかの繰り返し構造が見られることが多かった。

ジャーゴンでは会話的な歌の事例は少ないものの事例6では会話の中の応答部分に意図的に「♪バーバビボビボボーン」というジャーゴンを差し込み、「分からんと思うけどね」と相手の理解をはぐらかすような遊びとして、ジャーゴンとしての歌を用いていた。

事例6 3歳女児L（会話的歌）

女児Lが保育室で紙に絵を描いている。

女児L	「先生ぼんちゃんがいた」 「♪ボンボボボーン」 (略)
観察者	「これ何書いてるの」
女児L	「ぼんぼん」
観察者	「ぼんぼん？」
女児L	「♪バーバビボビボボーン」 「分からんと思うけどね」 「♪ボボビボビーボボ、ボボーン、ボボーン」 『にんげんっていいな』の歌を歌い始める。 (略)
女児L	「♪ボンボンボン、ボーンボン、ボーンボン、ボンボンボン」 「あれどうしたぼん、ちょっとどうしていくぼんよ、♪ボーンボー

女児L	ン」 (略) 「♪タカイバーンタカイバーン、そこタカイバーン」 「♪タカイバン、タカイバン、タカイバーン。ターカーイ、ターカーイバン」
-----	--

一方でジャーゴンでは一人で何かをしているときに歌われることも多かった。事例7は登園時の母親との別れの後に、寂しそうな表情で歌われた独語的歌である。3つの歌の発語そのものは異なるものの、同一リズムが繰り返されていた。

事例7 4歳男児M（独語的歌）

男児Mは登園後、歌いながら朝の支度をする。

男児M	自分のロッカーにカバンと帽子をかけながら 「♪ダークダーク、キーシニー、ウソカッタデ」 「♪ヒトチキーチ、モーコバーテ、イタカタンデ」 「♪ウミーノチキ、チーカガー、アタカテンキ」 (歌いながら朝の支度を進める。)
-----	---

5. スキャットによる歌

スキャット事例では意味を持たない音節の繰り返しで歌が構成されており、音声の意味的な側面は持ち合わせないため、純粹に音の響き、リズム、メロディーなどを楽しんでいるものと考えられる。事例8では、女児Nと女児Oが「♪タッタラー」や「♪トゥットウトウルトゥットウル」といった複雑なスキャットを共有しており、このスキャットの共有によって楽しい場の構築が行われているようであった。

事例8 4歳女子N, O（会話的歌）

保育室で女児Nと女児Oが向かい合って座り、

粘土遊びをしている。

女兒 N, O	「♪ <u>タッターラー, タラタララータ ーラ。タッターラ。タッタター タラッタッタッタラ</u> 」
女兒 N	「いえーい！」
女兒 N	「何描きよん？」
女兒 O	「うーね。」
女兒 N	「うーね？」
女兒 O	「ベッド」
女兒 N	「ベッド!？」
女兒 O	「♪ <u>トウットウトウルトウトウ トウルー。</u> 一人で寝よる？」
女兒 N	「お母さんと寝よる。」
女兒 O	「O もお母さんと寝よる。ベッド やけど、ベッドの下で寝よるん よ。♪ <u>トウットウトウルトウトウ トウルー</u> 」 (女兒 O は先生のところへベッ ドを持っていく。)
女兒 O	「これ何でしょう? ベッドー!」 (女兒 O は折り紙を持って、女兒 N のところへ戻ってくる。)
女兒 N, O	「♪ <u>トウットウトウルトウトウ トウルー</u> 」 (歌いながら折り紙に絵を描い たり、折ったりする。)

次の事例9では、女兒 P が一人で折り紙を折っているときに「♪フーフー」や「♪ラーララー」が繰り返し発声されており、これも自らの楽しい感情の発露としてスキヤットが歌われているのではないかと考えられる。

事例9 4歳女子 P, Q, R (独語的歌)

保育室内で女兒 P, Q, R は折り紙をしている。女兒 P は作った折り紙を保育者に見せに行く。

保育者	「わー、すごい P ちゃん、次々ど できるねえ」
女兒 P	女兒 P は元の場所に戻り、新たに 折り紙をし始める。

	「♪フーフーフフーン」 再びできあがったものを保育者 に見せに行く。
女兒 P 保育者	「ねえねえ」 「おー、何かお舟みたいやね、P ちゃん」
女兒 P	元の場所に戻り、また折り紙をし 始める。 「♪ラーララーラーラー」

考 察

1. 即興的歌の言語的特質

本研究では、言語的な意味性の面から、意味性を有する即興的歌であるコトバ、オノマトペと、意味性を有しない即興的歌であるジャーゴン、スキヤットに分けた。その結果、すべてのカテゴリーで事例を見いだすことができた。

コトバ、オノマトペのカテゴリーに該当する事例1～5では、矢部(2011)が指摘するようにことばの抑揚を強調したり、変化させたりすることで拍節的、旋律的な構成を行っていたと推測することが可能である。

一方、ジャーゴンやスキヤットに該当する事例6～9では、抑揚を変化させるもとなった言葉が想定しにくい。この意味で、矢部(2011)が指摘したのとは異なる歌の生成もありえることになる。

ジャーゴン、スキヤットの共通点は、歌の歌詞にあたる部分の意味性を欠いていることである。事例6, 7のジャーゴンの場合、言葉やオノマトペの音声の入れ替えや自在な組み合わせなどのために元の言葉を推定しにくいほどに変わってしまったとも、他者からは理解不能な創発的なオノマトペが用いられたために生じたとも考えられるが、響きの楽しい音が即興的に結合させられたとも考えることができよう。事例8, 9のスキヤットの場合には、繰り返しの元となる意味を有しない単音節あるいは複数音節の繰り返しからなる。

さらに考えると、意味性を有するコトバやオノマトペであっても、それが繰り返されることで次第に意味性を欠くようになることを考えることもできる。例えば事例1では、「♪キューピーちゃん」が状況を超えて繰り返されることで、言葉の持っていた意味を離れて響きの楽しさが共有されるようになっていた。事例2では、「♪やっほー」であった言葉が、音が入れ替えら得ることで「♪しゃっほー」「♪やっこー」などと既存の言葉から変化して意味性を欠いてしまうのである。

上記のように言葉としての意味性よりも音響的な楽しさが優先される即興的な歌がある一方で、言葉に韻律的な強調や変化を加えることで、意味性をより強調させたり、より豊かなメッセージを含めたりする事例も想定され（たとえば事例4のほか、「♪ひみ、つー」「♪せんせいは？」など）、この点についての詳細は、今後の研究で検討すべき事項と考えられる。

2. 即興的な歌の会話的特質

次に本研究では、即興的な歌が会話的特質を備えているか否かで、会話的な歌と独話的な歌に分けた。その結果、従来議論されてきた会話の中で即興的な歌が歌われる場面も多く見られたが、同時に一人にいるときに歌われる歌や誰にも向けられていない歌の存在も少なからず存在することも明らかになった。

「♪キューピーちゃん」を共有して繰り返した男児A,B(事例1)、「♪やっほー」をやりとりの中で変化させていった男児C,E(事例2)、男児Jに「♪ワーウワウワウ、ワウワウ」と吠え声を工夫しながら吠えかけていた男児I(事例4)、観察者を困らせるように「♪バーバビボビボビーン」と応答していた女児L(事例6)、「♪タッタラー」や「♪トウトウトウルトウトウルー」を共有した女児N,O(事例8)などは、矢部(2011)、千田(2011)、中川・片山(2015)などが繰り返し指摘してきた幼児間の相互作用から生まれでてきた即興的な歌と考えられる。

その一方で、事例3、5、7、9は一人の場面

で、あるいは他者は存在していてもその他者とのやりとりは欠いたまま即興的な歌が歌われた。つまり、社会的相互作用とは関わりなく生じる歌もあると言えよう。

さらに、単に独話的に一人で歌うだけではなく、大人などが介在することで歌うのを止めてしまう事例も観察された。たとえばさら粉を作っていた5歳女児は、さら粉を触りながら、「♪さーらっさーらになっただー、さーらっさーらになっただー」と歌うが、観察者と目が合うことで、歌うのをやめてしまった。この場合、この女児は大人に見られたくないプライベートなものとして歌を捉えていると考えることのできるのではない。

言語的な相互作用の場合には、独話(とりわけピアジェの言う集合的独話)は、ヴィゴツキーが提唱したように思考が内化されるプロセスに生じると考えられている。同じことが即興的な歌にも当てはまるとすれば、独話的な歌は、歌が内的なリズムやメロディーとして転化されるプロセスの途上に生じると見ることもできるのかもしれない。

一方で、幼児が整った形式を備えた音楽的刺激を日頃から豊富に受けていることを考えると、自らの即興的な歌を価値的に低いものと捉えているがゆえに他者に聞かれないプライベートな歌として認識している可能性もあり、この点も今後検討していく必要がある。

3. 音楽的特質をもたらす抑揚変化と繰り返し

さきに述べたように、本研究では言葉としての意味を離れて、音調の変化やリズムの変化を付け加えることで、音声の音響的な楽しさが優先される即興的な歌が多く見いだされた。本研究で検討した多くの事例で、韻律的なおもしろさのある即興的な歌を歌うことそのものが遊びであると言ってもよいかもしれない。

一方で、言葉に抑揚変化を付加するだけでなく、事例1の「♪キューピーちゃん」の繰り返しのように、何度も同じフレーズを繰り返すことで、言葉の持つ強固な意味性をはぎとり、意味を持た

ない音的な素材として用いることを可能にする事例も見られた。

このフレーズや音の繰り返し（オスティナート）は、本研究で取り上げた多くの事例（事例1～6, 8, 9）で認められ、唯一の例外である事例7でもフレーズは異なるものの、リズム面では繰り返し構造が見られた。

このような繰り返し構造への着目はこれまでの研究ではあまり十分ではなかったように思われる。しかし、小池・深田（2016）で、5歳児がオノマトペを用いて即興的なアンサンブルを行った実践でも、リズムパターンや声の強弱の変化に加えて、オスティナートが自発的な音楽表現において重要であることを見いだしている。この意味で、フレーズや音を繰り返すことの実践的な意味も大きいのではないかと考えられる。

今後、本研究で得られた知見をさらに深めるとともに、音楽表現実践の面からも、音声を自発的、即興的な音楽表現に転化させていくことについても実践的に確かめていきたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP15K04445 の助成を受けたものです。本研究に貴重な事例を提供して下さった仲田明日香氏（旧姓高橋）、下村加奈子氏（旧姓高橋）、野中未来氏に感謝します。また、事例収集に協力して下さった山本櫻子氏に感謝します。

引用文献

- 遠藤 晶 (1999). 幼児における音楽に合わせた身体表現の発達: 歌いながら動く表現の獲得過程. *educare*, 20, 43-49.
- 藤田美美子 (1998). 子どもの生活と音楽(5): 言葉遊び・歌遊びの世界. *幼児の教育*, 97(12), 34-43.
- 細田淳子 (2001). ことばの獲得初期における音楽的表現: 子どもがうたい始めるとき. *東京家政大学研究紀要*. 1, 人文社会科学, 41, 107-113.

小池美知子 (2015). 5歳児クラスの声と動きの活動に見られた表現の様相. *松山東雲女子大学人文科学部紀要*, 23, 15-24.

小池美知子・深田昭三 (2016). 幼児のための創造的な音楽プロジェクトの開発: オノマトペを用いた即興的なアンサンブルの効果. *松山東雲女子大学人文科学部紀要*, 24, 29-42.

持田京子・金子智栄子 (2008). 子どもの創造的音楽表現に及ぼす保育者の影響. *文京学院大学人間学部研究紀要*, 10(1), 37-47.

中川華那・片山美香 (2015). 音楽による幼児の表現活動の意義と保育者の援助に関する研究: 人とかかわる力を育むために. *岡山大学教師教育開発センター紀要*, 5, 73-82.

野中未来 (2013). 幼児が音とかかわる経験の意味. *平成24年度 愛媛大学教育学部卒業論文*.

坂井康子・五味克久 (2003). 子どもの歌唱に関する研究について: 幼児の「つくりうた」の分析に基づく提言. *神戸大学発達科学部研究紀要*, 10(2), 327-336.

千田恭子 (2011). 年中児の音環境についての探索的研究: 年中児と保育者の音に関する発話に着目して. *富山大学人間発達科学部紀要*, 6(1), 73-82.

高橋明日香 (2008). 幼児の生活において自発的な歌がもつ意味. *平成19年度 愛媛大学教育学部卒業論文*.

高橋加奈子 (2012). 幼児の自発的な歌とその出現場面. *平成23年度 愛媛大学教育学部卒業論文*.

矢部朋子 (2011). 幼児の遊びにみられる音楽的表現の共有過程. *保育学研究*, 49(2), 168-176.